

人が決めてもダメでした

人間と家畜の関係性

■ 1 ■ ノマド（遊牧民）に惹かれて

幼い頃から数年ごとに引越しをしていたせいも、新しい場所へ移る際に感じる高揚感と緊張感はわたしの人生の楽しみでもある。おかげで現在でも、職も居住先も落ち着きなくさまよっているのではあるが、思い返せばモンゴルに興味を持った理由はそのノマディック(nomadic：定住地をもたない)な生活形式であった。わたしが大学生の頃、文化人類学を教えてくださいました吉野晃先生は“生業”を扱った講義のなかで、「遊牧」という言葉を黒板に書き、次のように述べた。

「遊牧という文字には“遊ぶ”という字が使われているため、ぶらぶらして時を過ごすイメージがありますが、きちんとした論理で彼らは動いています」。

講義を聞いてから著しく時が経ってしまったため、詳細な言い方などは異なっていたはずだ。しかし、「遊牧」が、論理的に展開されているというその言葉は、わたしをひどく魅了した。「遊牧の論理を知りたい」。それが、わたしがモンゴルをフィールドとする一つの動機でもあった。

■ 2 ■ 家畜利用とその原理

牧畜は、狩猟採集、農耕とならぶ生業せいぎょうのひとつである。家畜を飼育し、乳、肉、皮などを得て加工をし、畜産物を得る。その畜産物に依拠し生活する形態が牧畜である。牧畜の起源は諸説あるが、近年の考古学においては、紀元前9千年紀半ばに南東アナトリア（トルコ南東部）のタウルス山脈南麓で始まったと考える説が有力となっている [マルジャンほか 2008：80]。現在では、アンデスのリヤマ、アルパカ飼育、中央ユーラシアのウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダ飼育、ロシアやスカンジナビア半島など極北のトナカイ飼育、西アジア、アフリカ北部などのラクダ飼育、アフリカでのウシ飼育など、世界中で多様な形態の牧畜が行われている。家畜化された動物には、群居性有蹄類ゆうていであるという共通点がある。彼らは自発的に群れる性質をもっているため、人間は家畜をまとめて管理することが

可能になるのである。

これまで人類学では、牧畜形態、人間と家畜の関係性（ドメスティケーション、放牧原理、儀礼時における家畜利用など）、畜産品をはじめとした物質文化分析（畜産物の呼称など）、牧畜社会分析（国家政策に伴う社会変容）など、牧畜を取り巻く諸要素に関し分析が行われてきた。ここではわたしのフィールドであるモンゴルを例に、人間と家畜の関係性の一端に焦点を当ててみよう。

モンゴルでは5畜（ウシ、ウマ、ヤギ、ヒツジ、ラクダ）を組み合わせて、数世帯で構成される宿営集団（ホト・アイル）で飼育管理する移動式牧畜が主流である。1ホト・アイルが管理する家畜は1,000頭を超えるケースも少なくない。多数の家畜を少ない労働力でコントロールするためには、「人が家畜に介入し、群れを管理しやすくすること」が欠かせない。例えば、種オスに“ふんどし”をはかせて交尾を制限したり [小長谷 1996：34-35]、種オス以外は去勢するなど、パースコントロールを行う。家畜を去勢することは、肉質を柔らかくするほか、家畜の性格を穏やかにし群れとしてまとまりやすくすることにもつながる。

また、牧地選定も牧畜を行う上での重要な作業である。モンゴルでは、一定周期で寒雪害（積雪などのため家畜が草を食べられず衰弱死するといった、冬から春にかけての厳しい気象条件下で家畜が死に至る事象）が発生することが知られている。寒雪害では家畜をすべて失うこともあるため、牧畜民にとって避けたい災害である。被害を最低限に食い止めるための一つ的手段として、夏から秋にかけて良質な草の生えている場所で放牧し、家畜に体力をつけさせる方法がある。そのため人々は、草原を様々に区分して認識し、状況に応じて利用する民俗知をもっている。また、雪害を避けて通常の放牧地を離れ、長距離移動をすることも厭われない。いずれにせよ、適切な時期に適切な放牧地へ移動することが大切である。

■ 3 ■ あなたはなぜ移動したの？

2012年末から2013年にかけての冬、わたしはモンゴル東部のヘンティー県にて牧地選定に関し聞き取りを行っていた。近年は温暖化の影響もあり、雪害が頻繁に起きるのだが、その年は珍しく草の量も質も良い年であった。そのため、大抵の牧畜民は、長距離移動はせずに通常の移動範囲のなかで牧畜を行っていた。

そんななか、珍しい世帯に出会った。彼らの移動距離は通常の移動範囲をはる

洗濯物の下をくぐっちゃダメなわけ

バリ島における上下の秩序と世界観

■ 1 ■ 洗濯物の下をくぐってはいけない？

インドネシアのバリ島の人々は、洗濯物の下をくぐることを穢れるとして忌み嫌う。だから洗濯物は基本的に（頭より）低い位置に干す。日本のように2階のベランダに干すことなどあり得ず、2階建ての住居であろうと、洗濯物は1階の最も「不浄」な方角（南バリでは南西）の低い場所に干す。なぜ？と外部の者なら思うだろう。実際、日本のテレビで、バリでのこの「変わった」洗濯物の干し方をクイズにして紹介していたのを偶然見たことがある。メディアでは、「不思議の島」「神秘の島」などと呼ばれるバリ島でのいかにも不思議な風習といった扱いだっただけだ。

だが、こういった生活のなかでの決まりごとはどの社会にも存在することである。ちょっと考えれば日本でも、ご飯は左、味噌汁は右、魚の頭は左など、外国人からすればそれこそ訳のわからない決まりごとは無数にある。わたしの母などは、外国人が浴衣を着るとみんな左前になっていて「ぎょっとする」とよく言っていたが、この「ぎょっとする」感覚と、バリ人が洗濯物をくぐることに對して覚える嫌悪感とは、本質的に同じである。いわゆる、「穢れ」の感覚である。

■ 2 ■ パンツで知る上下の秩序

人間社会に普遍的に存在する「穢れ」の感覚は、衛生観念とはまるで関係ないものであることを、人類学者は明らかにしてきた（ダグラス 1972、リーチ 1981、ニードム 1993 など）。それはそれぞれの社会で構築されている文化的秩序の問題であり、その秩序に反する、あるいは秩序から外れる物事を、私たちは「汚い」とか「汚らわしい」とか「危険だ」と感じてしまうのである。私たちは「右左」や「上下」といった分類枠組みを使って身の回りの世界を分節化し秩序づけているが、その秩序が社会のなかで徹底しているほど、それに違反するときの感覚は強く、まさに**身体感覚**として感じられるといえる。

バリ人が洗濯物の下をくぐることを「汚い」と感じる感覚は、非常に強いものである。実際にくぐってしまうと頭が痛くなる人も多いという。何がそんなに「汚い」のか？とバリ人に尋ねたならば、「だって、パンツがあるかもしれないでしょ？」といった答えが返ってくる。パンツの下をくぐるのが嫌なのである。より正確に言えば、身体じょうのなかで一番上に位置し、最も浄なる部位である頭がパンツの下にくるということが、「汚い」という強い感覚をもたらすのである。人類学的に言えば、上下の秩序の転倒による「穢れ」の感覚である。

バリでは、浄なるものは「上に」、つまり高い位置に、不浄なるものは「下に」、つまり低い位置に置くという習慣が徹底している。バリ人たちが重たい供物を常に頭の上に乗せて運ぶのは、それが神々に捧げる浄なるものだからである。洗濯物はそれ自体が不浄とされ、低い位置に干されるが、その一つひとつを干す際にも決まりがある。頭に巻く布などは物干しの一番上に、その下にシャツなど上半身に身につけるもの、そのさらに下にズボンなど下半身に身につけるものを干す。

そして最も不浄だというパンツは、地面ぎりぎりの一番下の段か、もしくはパンツだけ地べたに並べて干すのである。わたしからすればパンツを地べたに置く方がよっぽど汚いと思うのだが、バリ人たちはパンツを上にに干すことを汚いとして嫌忌する。パンツを仕舞うのも、一番下の引き出しである。あるとき、バリ人の友人は、わたしがパンツや靴下を一番上の引き出しに仕舞っているのを見てショックを受けていた。またあるときは、わたしが無地のシーツを使っているのを見た大家に、「それじゃ、どっちが上かわからなくなるじゃない！」と驚かれ、シーツの端にマジックペンで「上」と書かれたこともある。どうりでみんな、上下を間違えようのない大きな柄のあるシーツしか使っていないわけだ、と納得したものである。

■ 3 ■ 秩序の感覚と世界観

この上下 = 高低 = 浄・不浄の秩序は、礼儀作法や屋敷や寺院の構造をも貫いている。バリでは、基本的に座っている人の横に立つことは失礼とされ、座っている人の前を通る際にはひとこと断りの言葉をかけ、身を屈めたまま通る。また、社会的地位の高い人や年長者より高い位置に座らないよう、常に気を配っている。

ウシに生きられなくなった人々

代わりにレモンじゃダメですか？

■ 1 ■ 人生うまくいっていますか？

みなさんは今、自分の理想通りの人生を生きていると胸を張って言えるだろうか。人生には様々な岐路や転機が存在する。自分で自信と責任をもって選択をした道もあれば、なんだか流されるままに選ぶことになった道、諸々の事情からやむを得ず選ばざるを得なかった道もあるだろう。

ところで、「難民」と呼ばれる人々が存在する。日本では、「難」を抱える「民」というその字のごとく、理想通りの人生を生きていない最たる人々として語られるかもしれない。もちろん、この側面も大いにあるだろう。難民の抱える悲しさや脆弱さにばかり目が行くが、その一方で、様々な困難に人々がどのように対処しているか、そのための知恵や実践、戦略についてあまり注目されることはない。ここでは、日本から遠く離れたアフリカに生きる、難民たちの「危機」とその乗り越え方を紹介しよう。

■ 2 ■ ウシの供犠

南スーダン共和国に暮らす**農牧民ヌエル**（ヌアー）は、1920年代から30年代にかけて調査を行ったエヴァンズ＝プリチャード（Sir Edward-Evan Evans-Pritchard）の民族誌で広く知られている。「ウシに生きる人々」として描かれたヌエルであるが、ウシは、彼ら・彼女らにとって単なる食糧、家畜ではない。ウシは、**花嫁代償**（婚資）の支払いや殺人の賠償など、生活のあらゆる場面で重要な役割を果たす。民族誌で描かれたウシを中心に展開する彼らの豊穡な人生は、私たちにあって常識的な「豊かさ」や「貧しさ」、「幸福」と「不幸」を覆す。つまり、ここではウシを持つ者こそが豊かで幸福である。その基準からすれば、私たちは何とも哀れな貧民である。

なかでも、ウシの**供犠**は人々の精神世界の安寧においてなくてはならない**儀礼**である。ヌエルは様々な機会に供犠を行う。ヌエルでは、人間の人生のあらゆる

場面に、ヌエル語でクウォスと表現される神や精霊が介入していると考えられる。災厄や不幸もクウォスによる働きかけの結果であるし、逆に幸福や幸運も、クウォスによってもたらされたものである。例えば、天災が生じたときや重い病気になったとき、妻が不妊のときや罪を犯したとき、結婚式、成人式などのときに供犠は行われる。供犠は、人間の諸事に介入するクウォスをなだめたり、感謝したりするために行われる。そのとき、供犠獣は、人間の不幸を防ぎ、罪を浄化する媒体となる。そして災いは供犠獣の血とともに土の中に吸い込まれる。

供犠は、ウシだけでなく、場合によってはヤギや、穀物によっても行われる。興味深いのは、ヌエルの場合、ウシが手に入らない場合は、野生のキュウリ（学名 *Echinocystis lobata*）を同じように供犠をしてもよいことになっている。村でキュウリを使って供犠を行う際、人々は「キュウリは雄牛である」と表現する。

2011年に国家として独立して以降、南スーダンでは度重なる武力衝突が生じている。このなかで、ヌエルの人々は人生の中心であるウシを失い、故郷を離れることを余儀なくされている。難民となった現在、ヌエルの人々は、結婚を決めたり、日々のちょっとした問題を解決したりするのもウシなしで行わなければならないようになった。次に紹介するのは、ウガンダに逃れたヌエル人難民の知恵の一端である。

■ 3 ■ ウシを失ったとき

2018年、ウガンダ共和国の難民定住区にて、わたしはヌエル人難民に毎日のようにお茶をおごってもらっていた。ある日、離れたところに若い男性がポツンとひとり座ってお茶を飲んでた。まわりにいた男たちは、乾いた笑いとともにその男を指して次のように言った。「ヌエルの伝統について聞きたいなら、大地の司祭の、あいつに聞くといいよ。今はもうどの村にも政府（警察）がいるから、彼らの意味は完全になくなったけどね」。

「大地の**司祭**」とは、ヌエルの世襲の宗教的職能者である。彼らはかつて、「首



国内避難民キャンプで売りに出されてしまったウシたち